

エゼキエル書12章21-28節 「すぐ近くにある幻」

1A 「日は延ばされ、すべての幻は消え失せる」

- 1B 延ばされることのない幻
- 2B 選民の訴えを聞かれる神
- 3B 希望を注がれる聖霊
- 4B 「主人はまだ来ない」
- 5B 来臨への嘲り

2A 「幻はずっと後のこと」

- 1B 今、喜ぶべき幻
- 2B 近づいている御国
- 3B 信じる必要
- 4B 信じないことの裁き

本文

エゼキエル書 12 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、11 章まで来ました。今日の午後に、12 章から 14 章まで読んでみたいと思います。今朝は 12 章 21-28 節までを見てみたいと思います。

21 さらに、私に次のような主のことばがあった。22 「人の子よ。あなたがたがイスラエルの地について、『日は延ばされ、すべての幻は消え失せる。』と言っているあのことわざは、どういうことなのか。23 それゆえ、神である主はこう仰せられると言え。『わたしは、あのことわざをやめさせる。それで、彼らはイスラエルでは、もうくり返してそれを言わなくなる。かえって、その日は近づき、すべての幻は実現する。』と彼らに告げよ。24 もう、むなしい幻も、へつらいの占いもことごとく、イスラエルの家からなくなるからだ。25 それは、主であるわたしが語り、わたしが語ったことを実現し、決して延ばさないからだ。反逆の家よ。あなたがたが生きているうちに、わたしは言ったことを成就する。…神である主の御告げ。…」26 さらに、私に次のような主のことばがあった。27 「人の子よ。今、イスラエルの家は言っている。『彼が見ている幻はずっと後のことについてであり、はるか遠い将来について預言しているのだ。』28 それゆえ、彼らに言え。『神である主はこう仰せられる。わたしが言ったことはすべてもう延びることはなく、必ず成就する。』…神である主の御告げ。…」

預言者エゼキエルは、離散の地バビロンにおいて、改めてバビロンによって、エルサレムが破壊される幻を、そこに居る人々に伝えました。エルサレムが包囲されているところから、最後のユダの王ゼデキヤが逃げる様子を、自分の家で荷物を整えて逃げていく姿を演じることによって、見せました。また僅かなパンと水を、気を付けながら食べて飲む姿も、演じながら人々にエルサレムで何が起こるかを示しました。しかし、ここバビロンにおいても、かつてエレミヤが対決しなければい

けない問題と、同じ問題がありました。

それは、偽預言です。エルサレムが破壊されるという預言に対して、「そんなことはない。そのようなことは、起こらない。エルサレムというところは、神の宮があるところであり、神が共におられる。そして、ユダは多くの国々と同盟を結び、南の国エジプトが助けに来てくれることになっている。」というのが、大方の見解でした。そのような人々の思いや願いを、そのまま主の御名によって、「これが、主の語られることです。」と言って語っていたのが、偽預言です。神の思いや願いではなく、人々の願っていることや思っていることに、神のお墨付きを与えるということをやっていました。

誰もが、エルサレムが裁かれることを願っていません。主ご自身も、そうです。ご自身はエルサレムを滅ぼしたいと願っておられません。しかし、彼らが罪を犯し続けて、悪を行なっているのであれば、その行なったことに対して報いを与えなければ、神の御名が汚されてしまいます。それで、主はエルサレムをバビロンによって破壊します。

けれども、自分の生活は変えない、悔い改めるなんていうことはしない。けれども、エルサレムが破壊されるなんていうことは、起こってほしくないと願います。それで、人々は二つのことを願いました。一つは、22 節、「**日は延ばされ、すべての幻は消えうせる。**」であります。エゼキエルがこの預言を語って、五年後に起こることでした。けれども、「日が経てば、そう語られた言葉もかすれてくるだろう。」と考えました。それで、悔い改める、自分を変える必要性を感じなくてすんだのです。もう一つは、「**彼が見ている幻はずっと後のことについてであり、はるか遠い将来について預言しているのだ。**」ということです、何百年後の話にしてしまえば、自分とは関わりがないと思えますね。これは、多くの人々が考えていることではないでしょうか？「聖書が二千年も前に語られたこと、なんですね。であれば、それを今の時代に当てはめるのは、いかがなものかと。」なんていう言葉を聞きますね。当時は、そうであったかもしれないが、これだけの時間が経っているのだから、聖書の言葉は今には当てはまらない、とします。これは、「すべての幻は消え失せる」と思っていることですね。もう一つの、「**はるか遠い将来**」については、将来の約束について、終わりの日について、それはいつ来るか分からない、何百年も後かもしれない、と話します。しかし、これから説明していきますが、それは主ご自身も、また使徒たちも教えていないことです。

1A 「日は延ばされ、すべての幻は消え失せる」

一つ目の、「**日は延ばされ、すべての幻は消えうせる。**」についてもっと考えてみたいと思います。

1B 延ばされることのない幻

主はこのような考えに対して、「**かえって、その日は近づき、すべての幻は実現する。**」と言われます。時間が経てば過ぎ去るのではなりません。私たちは、「時間が経てば、忘れてくれるんじゃないか。」という期待をかけますね。けれども、主の言葉については全くそうではありません。むしろ、主は時を定め、ご自分の幻を実現されます。したがって、時間が経てばそれだけ、その実現する

時が近づくのです。パウロは、再臨についてこのように言いました。「ローマ 13:11-12 あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。」主が来られるのが、信じた頃よりも近づきました。ゆえに、暗闇の業を捨てて、光の武具を身に付けます。

主は、私たちにご自分の幻については、必ず実現するから、しっかり待ち望みなさいと励ましてくださっています。ハバククが、ユダが罪を犯して、それでバビロンがユダを滅ぼすことを聞いて、もっと悪い国がどうして裁きの器として用いられるのか、その矛盾や不条理が理解できなかった時に、主が語ってくださいました。「ハバクク 2:3-4 この幻は、なお、定めのためである。それは終わりについて告げ、まやかしを言ってはいない。もしおそくなっても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。見よ。心のまっすぐでない者は心高ぶる。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」こう言われて、主はバビロンを徹底的に滅ぼされることを、彼に教えてくださいました。主は、定めの時を作っておられます。ですから私たちは、遅くなっていると思っても、しっかり待ちます。そして、遅れることはないのです。主がする、と決められたら、必ず行ってくださいます。

2B 選民の訴えを聞かれる神

ですから、私たちは信じて待つingことが必要です。祈って、訴えることが必要です。主が、不正の裁判官の話をされた時のことを思い出してください。人を人と思わぬ裁判官がいたのですが、しつこい寡がいて、「うるさくて仕方がないから、裁判をしてやることにしよう。」と思いました。そこでイエス様は、弟子たちを励まされます。「ルカ 18:7-8 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」いつまでも放っておかれることはないのです。けれども、信仰をもって神に呼び求めているかどうか？と問いかけておられます。

3B 希望を注がれる聖霊

私たちは約束の日を期待し、喜びをもって主に仕えます。このように主を待っている過程を、聖霊が助けてくださいます。パウロは、患難があっても必ず希望の中に生きることをこのように言いました。「ローマ 5:3-5 そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」私たちが、今、困難な時を過ごしているかもしれません。けれども、困難な時にこそ忍耐が生まれます。そしてその中で品性が培われます。そして品性が培われると、希望に満たされるようになります。絶えず、その期待していることが失望に終わらないことを示すために、神の愛が聖霊によって注がれているのです。神の愛は、キリストが十字架に、

罪人である私のために死なれたところに表れています。そのことを聖霊によって示されて、それで希望が失望に終わらない、幻が消え去れることはないことを教えてくれるのです。

4B 「主人はまだ来ない」

ですから、私たちは信じて、そして忍耐します。ところが、私たちがこの忍耐をやめてしまったのでしょうか？この営みを私たちがやめてしまうとどうなるのでしょうか？そうすると、起こることがあります。それは、イエス様ではない他のことをするのに、心が奪われてしまうことです。イエス様が戻って来られると期待することによって、自分の望みは神にあることを知っていますが、その幻を失ったら、イエス様ではない事柄に気がそれてしまいます。そしてついに、自分のしたいこと、自分の欲に仕えるようになります。悪い僕の喩えを思い出してください、イエス様が言われました。「マタイ 24:48-50 ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い、その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。」**まだまだ、帰るまいと呟きました。**それで、自分のしたいこと、打ち叩いたり、酒飲みたちを飲んだり食べたりするようになってしまうのです。

5B 来臨への嘲り

そして、主人はまだまだ来ないだろう、ではなく、「もう来ないだろう。」と思いがったら、終わりですね。しかし、そのことを終わりの日に人々が実際に行なうと使徒ペテロは言っています。「2ペテロ 3:3-4 まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」」主の来臨について、嘲ります。嘲って、そして自分の欲望に従って生きています。これがまさに、当時のエゼキエルの時のユダヤ人に起こっていたことです。「いずれ、バビロンの脅威はなくなるだろう。」と考えて、自分たちの悪を継続していました。

2A 「幻はずっと後のこと」

では、二つ目をもう一度考えてみましょう。「**彼が見ている幻はずっと後のことについてであり、はるか遠い将来について預言しているのだ。**」であります。

1B 今、喜ぶべき幻

主は、終わりの日の幻だとしても、今、それを受け入れて、喜んでほしいと願われています。遥か遠くの事としてではなく、今、来るかもしれないと信じて受け入れる時に、その終わりの日に起こることの前味を味わうことができます。終わりの日のすばらしい約束が、霊的に自分の身に起こるのです。パウロは、「2コリント 5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」これは、黙示録 21 章 4-5 節に書かれており、新しいエルサレムが、新天新地の中で実現することですが、霊的に自分の内で聖霊によって新しくされることで、起こるのだよ、新しい創造があなたの内から始まるのだよ、と言っ

ています。

2B 近づいている御国

主は、神の国について、決して遠い将来のようにして語られませんでした。バプテスマのヨハネも、イエス様ご自身も、「悔い改めなさい。天の御国は近づいたから。(マタイ 4:17)」と説教しました。神の国がどのように近づいていたのでしょうか？メシヤなるイエスがすぐそばにおられたことになって近づいていました。この方が語られ、行なわれるところには、神の国と力が現れます。そして、天の御国についてイエス様は山上の垂訓で、宣言されましたね。「マタイ 5:3 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」自分の霊が全く神の前で何もないこと、乞食であることを告白する時に、天の御国がその人に臨みます。幸いです、と主は言われています。すでにその幸いを得ているのです。すでに天の御国をそこで味わうことができているのです。

3B 信じる必要

私たちは、どうしても現在という時に自分のしたいことを入れたいくなります。何かと言いますと、過去には神は働かれていた。聖書の時代には主はおられた。そして、主は再び来られるであろう。あるいは、自分が死んだ後に天にあずかれる、と信じています。けれども、主は今も生きておられる、ということを知るのは、難しいです。過去と将来についての神の働きは信じるのですが、肝心の現在における働きは信じないのです。しかしヘブル書の著者は、こう言いました。「ヘブル 13:8 イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」主が昔、行なわれたことを御霊によって神は貴方の内で行ないたいと願われています。そして主が将来行われることについて、御霊によって今、あなたがたにその一部を味あわせたいと願っておられるのです。

私たちは、聖書については詳しいのに、ところが肝心要の、主が生きておられることについては信仰が足りない、なんていうことが起こります。「ルカ 17:20-21 さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」彼らは天からの徴を、求めていました。そして、神の国がいつ来るのかと尋ねたのです。けれども、イエス様は、「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」と答えられました。これは、イエス様ご自身がそこにおられるのに、そのリアルな姿を彼らは受け入れていなかったのです。自分たちの世界で生きてしまって、まさか自分たちのところに神の国が広がるとは、こんなに生々しく広がっているとは思っていなかったのです。パリサイ人たちは先に神の国があると語り、今は、自分たちの宗教の教え、組織などのことをやっていて、今と将来を完全に分けて考えていたのです。そしてイエス様を、横に追いやってしまいます。

しかし主は、ここにおられます。ここにおられるだけでなく、自分のあらゆる生活でおられます。ですから将来の幻であるにも関わらず、神の国をイエス様にあってそこで体験できるのです。そのよ

うに見えなくても、いや、いないように思える、感じるような時にこそ、神がおられると信じるのです。すると、主ご自身がリアルにおられることを知り、驚きます。私たちには信仰が必要です。「ヘブル 11:6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。」

4B 信じないことの裁き

けれども、もし信じなければ、ここでユダヤ人たちがエルサレムで裁かれたように、裁かれてしまいます。その裁きと、どういうことか、使徒ヨハネは上手に語っています。「ヨハネ 3:18-20 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれている。そのさばきというのは、こうである。光が世に來ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かつたからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに來ない。」

御子を信じないのであれば、それは将来に裁かれる前に、既に今も、裁かれていると言っています。その裁きというのは何かと言いますと、「人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かつたからである。」とあります。イエス様がおられて、そこには神の国が広がっているのに、その光に來ようとしません。なぜなら、光よりも闇を愛したから、悪い行いをしているから、ということであります。まるで逃亡生活しているように、夜にだけ外出して動いているようにされているのです。こんな不幸なことはありません。行ないが悪いから、いつも暗闇にいななければいけない。ついに目で見ることなく、この地上では何も生きる意味が見付けられなくなる。そして、自分自身も将来、滅んでしまいます。

ですから、信じてください。約束は必ず実現します。今、イエス様はここにおられます。昔のことでもなく、将来のことでもなく、今、主は貴方の内でご自分が生きたいと願われています。